

墳丘構築技術から見た秋常山1号墳築造の思惟

伊藤 雅文

問題の所在

本県で100m超の前方後円墳の存在が知られるようになったのはごく最近である。金沢大学考古学研究会の分布調査によってこの大形古墳である秋常山1号墳が発見され（金大考古研1986）、平成4年から始まった墳丘確認調査によって古墳の様子の一端が明らかとなったものである。本墳は能美郡寺井町字秋常に所在する。和田山古墳群や末寺山古墳群等からなる能美古墳群の一角を占め、かつ最大規模を有する。刊行された報告書によると、三段築成の前方後円墳で、全長140m、後円部径110m、前方部長30mを測るという。1号墳の西に前方後方墳と考えられる2号墳が隣接し、中期前半の円筒埴輪片が出土している。（寺井町1996、1997）。二古墳が作られた前後関係はよく分からぬが、1号墳から2号墳と考えられており、前方後円墳から前方後方墳を作り、北陸にあっては、特異な状況といえる。1号墳の葺石は、上・下段（中段 - 報告書による - ）に置かれ、最下段（下段 - 報告書による - ）は東側くびれ部に想定されている造り出しに葺石状の配石が検出されているものの、築造時のものか不明である。

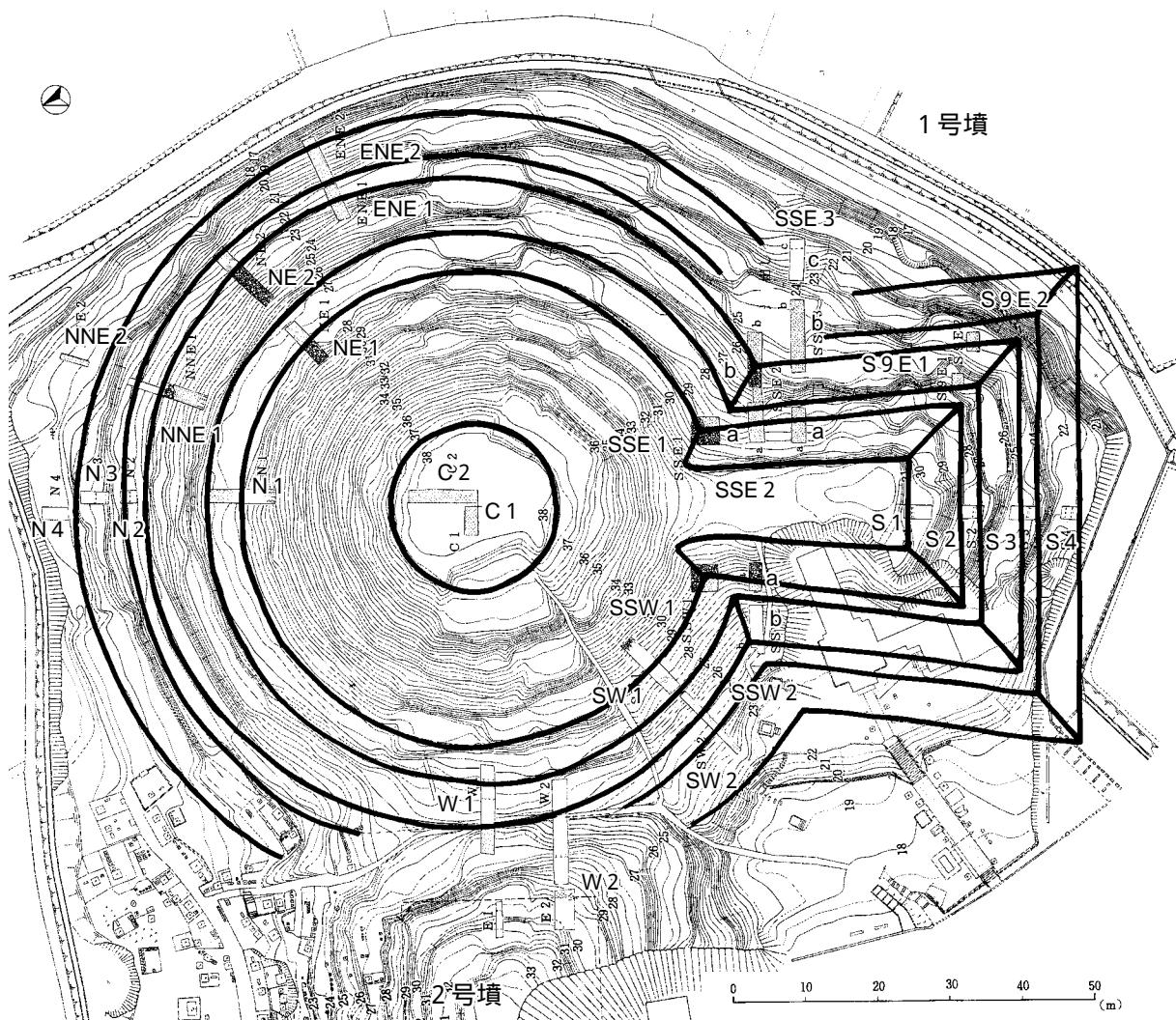


Fig. 1 三段築成による墳丘復元とトレンチ配置図

筆者は発掘調査段階の初期から現在に至るまで調査団員の一人としていろいろ関わっているが、今もって本墳の墳丘をどう理解するかということについて何か模倣として訛然としないものをもっている。それは、この古墳があるいは古墳群がどのように作られたのかということについて、自分なりの明確な答えが出でていないためではないかと考えるのである。

たとえば最下段についてみると、本墳のようなタイプの場合墳丘の一部と見るのは、それとも墳丘とは区別されるものとするか、研究視点によって論の分かれどころであろう。本墳では後円部を中心とし、墳丘の遺存状況が良いように見えるようだが、実は前方部端が大きく削平されて段状になっていることや葺石の欠失等後世の改変が著しいことから、自分なりの明確な答が得られないであろう。また、本墳の最下段の理解によって報告書に記載されたような規模を考えるのか、それともそれより小さなものとするのか、という違いが生じるが、これによって京都府蛭子山古墳や福島県会津大塚山古墳のような最下段を構成する部分が墳丘を全周しないような古墳との関連において少なからず影響を及ぼし、築造企画論においてもつながっていくものである。

したがって、本稿では発掘調査成果から秋常山1号墳がどのような技術で構築されたのか検討し、どのような古墳を作ろうとしたのかを考察することにしたい。もちろん、築造に際しその設計図たる企画が存在したはずでありその検討も必須なことであるが、本稿ではそこまで論を及ぼすには未だ力量不足を痛感している。しかも、史跡整備事業に着手したばかりでありこれから墳丘などに関するより多くの情報を得ることができると考えられるので、それから検討した方がより充実した研究を行うことができよう。発掘調査は学術調査ということもあってごく狭い面積しか実施されていないので、限られた情報から類推することとなる。

なお本稿では、上段・下段・最下段の段築とし、上段と下段の間の平坦面を上段テラス、下段と最下段の間の平坦面を下段テラスと称することとする。

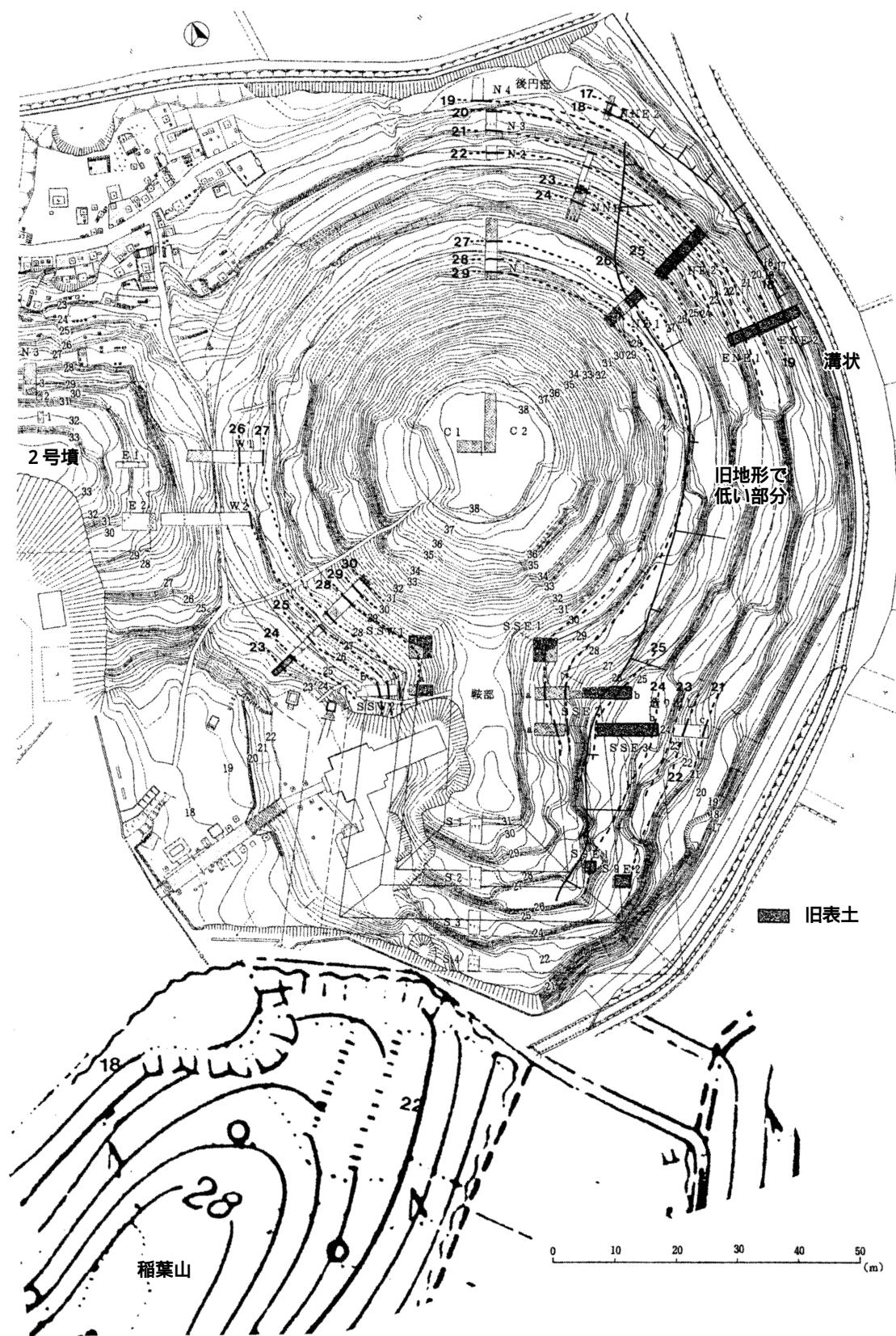
秋常山1号墳の築造方法

旧地形と築造面

1号墳の29箇所に設けられたトレンチの土層状況を検討することによって、どのような地形に古墳が作られたのか、ある程度の推測が可能である。それは、墳丘斜面に地山が露呈していたり葺石直下に地山が観察される部分は元の地形を削りこんだ部分であり、古墳築造前の表土層が観察される部分は旧の地形の面影を残した部分であることを示していることによる。

旧表土が検出されたのは、NE1トレンチ（標高27.0m以下の部分）NE2トレンチ、ENE1・2トレンチ、S9E1トレンチ、S9E2トレンチ、SW2トレンチである。これらのトレンチでは、厚いところでは1m以上の盛土が確認されている。つまり表土を残した状態で古墳の盛土が施工されたことを示している。また、NNE2トレンチ、くびれ部に位置する SSE2トレンチと SSE3トレンチでは、旧表土系土層は確認されないものの、厚いところで1mの盛土下には地山が傾斜をもって検出され、古墳築造前の地表面に近い部分であったことが推測される。これらのトレンチは共通して墳丘東側に位置し、東に向かって下がる傾斜地形に土盛りすることによって墳丘を作ったことがわかる。

次にNE1トレンチを仔細に観察する。墳丘上段と下段との間のテラスでは一部盛土がかかっているが、上段テラスの水平を調節するかのような盛土であり、葺石幅から50cm離れてはじまっている。旧表土は標高約26.8mまで検出され、その盛土層に見かけ上切られている関係にあり、まさに地山削り出しと盛土の接点にあたる。確認された位置が上段テラスということから考えれば、この面が墳丘築造の基準となったことを示している。検出された墳丘上段の葺石基底石の標高がほとんど水平で



あるが、下段の葺石基底石の標高が後円部北東よりも東側くびれ部が約2m高く前方部と後円部でかなりの高低差が生じていることからもうなずけるところである。

一方、これら以外のトレンチで地山が確認された。その部分が築造当初に盛土が施されたとしても地山が傾斜をもっていることから、厚い土盛りを想定することはできない。つまり、墳丘の西側は尾根を削ることによって作られたものであり、葺石裏込め土としての盛土あるいは墳形を整形するための盛土を想定するのが妥当であろう。

N1トレンチでは標高28mまで地山を確認しており、SW1トレンチやS1トレンチでは標高30.5mまで地山である。また、秋常山2号墳の旧表土は南東崖面で標高30m付近にある。1号墳で確認された地山確認地点はそれよりも高い位置に旧地表面が存在し、1号墳から2号墳に傾斜する旧地形の想定が可能である。他の大型前方後円墳や前方後方墳がそうであるように、本墳も後円部が旧地形の最高所に選定されたことがわかる。そして、1、2号墳間に深い谷状を呈するのは、墳丘構築による開削によるものであり、極端な鞍部を想定しない限り、1号墳から2号墳にかけてなだらかな尾根が続き約6mも削り込んでいる可能性もある。一種の丘尾切断による技術であろう。

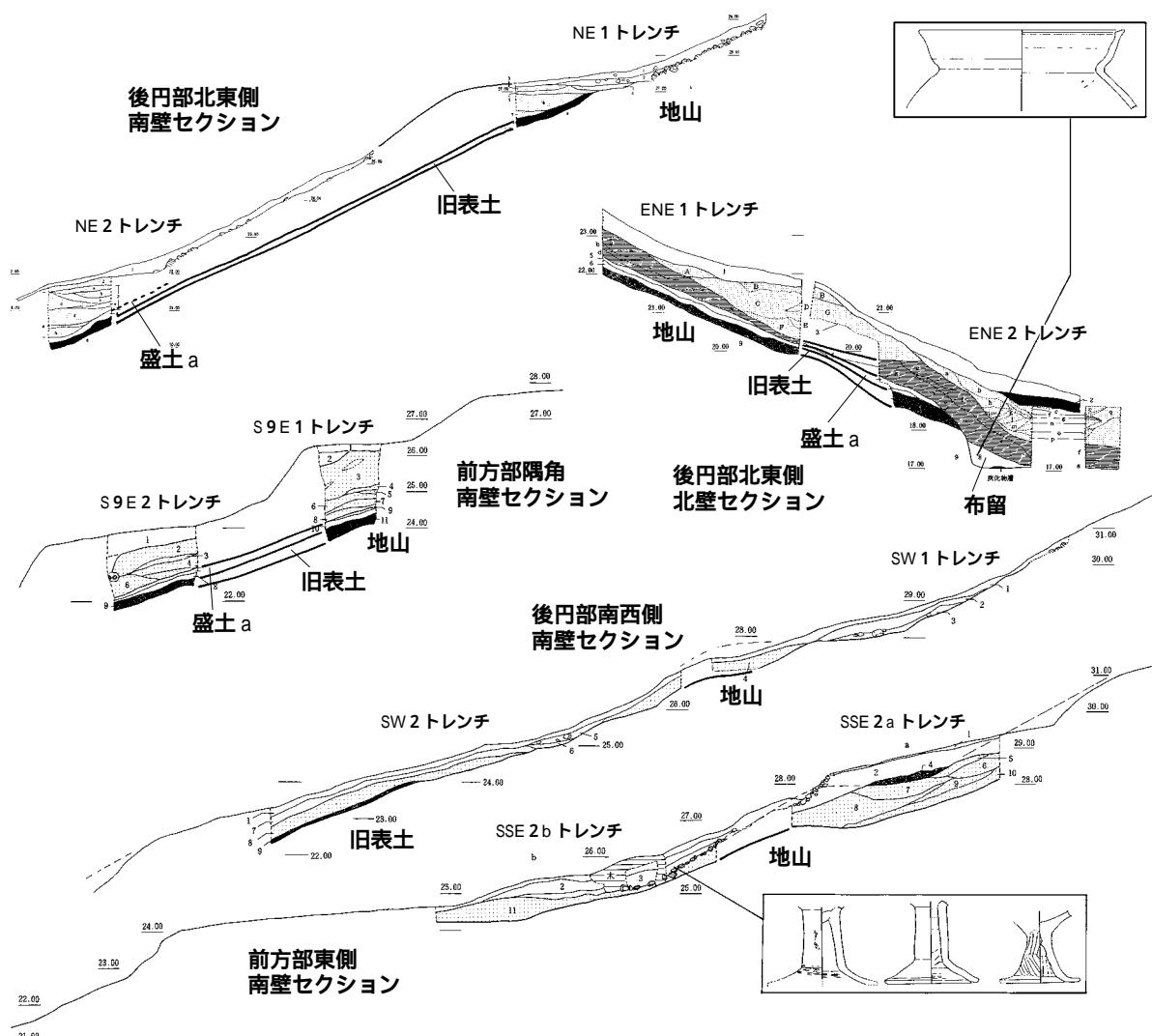


Fig. 3 1号墳検出盛土を中心とした土層セクション(1/200)と出土土器(1/6)

さらに前方部はどうであろうか。かつて前方部南に伸びていた丘陵（通称稻葉山）との続きを、それが記載されている1959年に作られた都市計画地図をもとに考える。本墳と南に続く尾根とは掘り割りの道路で分断されており、標高20mの等高線がその崖面に入っているようである。掘り割りは約4mの高さであることが地図から読み取ることができる。そうすると当時の崖面が現在とあまり変わらないことから現状の道路面が当時とほぼ同じ高さであったと推測でき、道幅を広くする等多少改変された程度と判断できよう。標高20mの等高線は当時にあってもそれぞれの尾根で収束していたと考えられ、1・2号墳間のように丘尾切断によって作られたものである。ただし、報告書中で前方部端で標高30.5mより高い旧地表面が想定されるので、おそらく、尾根が南に下がる地形を利用して前方部を削り出したものといえる。

また、前方部前面を通る現道路が古墳主軸と斜交するのは興味深い。前方部端は主軸に直交して作られることが基本であり、周掘りも墳丘平面の相似形を呈することを常としているからである。報告書で示されている前方部端では、道路建設のときに周堀を利用せずに前方部西隅角をわざわざ削ることとなるので、若干の不合理さを感じる。

なお根拠となるデータは無いが、標高32m以上の後円部の大部分が盛土によって作られている可能性を考えている。

盛土施工

本墳で確認された盛土は、葺石施工あるいはその補助のためのもの（類）と、斜め堆積を基本とするもの（類）、水平堆積を基本とするもの（類）の概ね三種類に区別される。

盛土類は葺石を断ち割っていないので確認していないものの、N1トレンチで葺石の抜き取りによって地山が露呈しているなど、地山に直接葺石を設置できないことから裏込め土の存在が不可欠である。盛土類葺石施工に際し必要不可欠なものである。

盛土類は、NE2トレンチやENE1トレンチ等で確認され、旧表土あるいは地山の傾斜に沿うように置かれている。ENEトレンチで、「砂質土を主体とする盛土」が一気に尾根の最下部まで施工されており、比較的均質な土が大きな単位で動かされている。SSE2トレンチやSWトレンチでも同じ状況である。各種の土を小さい単位で用いる盛土技法とは大きく異なり、傾斜した地山にこのような技法による土盛り作業が困難だったので、土を貼り付けて押さえつけるような盛土類によって構築されたものである。したがって、これは粗成形の一つの方法として存在するものであり、墳丘整備の方法ともいえよう。

このように見えてくると、古墳の大規模さに比べて葺石の遺存状態が極端に悪く、ほとんどが抜かれたり葺石石材が緩んでいる部分があるなどの遺存状況の悪さは、このような盛土方法に原因の一端を求めることができる。

一方、NE2トレンチでは20cm程度の厚みの粘質土が旧表土直上に盛られ、盛土類の範疇に含まれると考えられる。さらに大きな単位の盛土が上から下に向かってみられる。そして、地表近くになるにしたがって水平堆積に近く盛土類のようになる。外側を高くする盛土を意識しているようで、「周辺部から順じ内方に傾斜させつつ積み上げる技法」（樋本1978）とある面で共通するものと考えられるものの、周辺部としての外側で明確な内方に傾斜する盛土ないしは壇状の盛土の存在は不明確であるので、そのような特別な工夫をする意識とは異なる。すなわち、このような盛り方をした部位がテラスあるいは墳丘裾を明確にする平坦面にあたり、水平面を作り出すための方法であったとわかるのである。ここで注意しなければならないのは、このような重要な部位であっても、細かい単位の土の水平盛土を採用していないことである。

築造方法の諸例

地山削り出しを主体とする前方後円墳・前方後方墳は丘陵尾根に立地する例が多いと思われるが、尾根上に位置しながら墳丘下段のみ地山を削り出しそれより上部を盛土によって構築したり、地山成形でも平地に古墳を作るよう地山の削平をおこなうなど、その方法はさまざまである。ここでは尾根に位置し主に地山を削り出して作られた古墳について観察したい。

a 大阪府弁天山 D 2号墳（大阪府教委1967）

大阪府高槻市に所在し、古墳時代前期後半に作られた前方後方墳である。墳丘のほとんどが地山削り出しによって作られ、盛土は後方部北側(背後)と前方部で見られるほかは、全て地山である。また、秋常山1号墳と同じように葺石設置に盛土を用いている。細かな盛土単位は分からぬが地山の傾斜にあわせた土盛りとなっている。後方部三段、前方部二段の築成で、後方部は前方部頂平坦面に対するテラスや葺石基底列が見られず省略されており、後方部のみ一段高い状態である。葺石は各段に見られる。

下段前方部前面には、尾根筋にあたり周溝や葺石基底石列などの区画が見られないようであるが、そこよりも低い部分に葺石が遺存しているのはその高さが水平ではなくて傾斜する地形に合わせて葺石が構築されたからであろう。後方部背後は尾根が急激に瘦せて細くなることから、段の築成が不可能であったと考える。つまり、下段は葺石を伴いつつも構築可能な部分、別な観点からすると必要な部分しか作っていないのである。

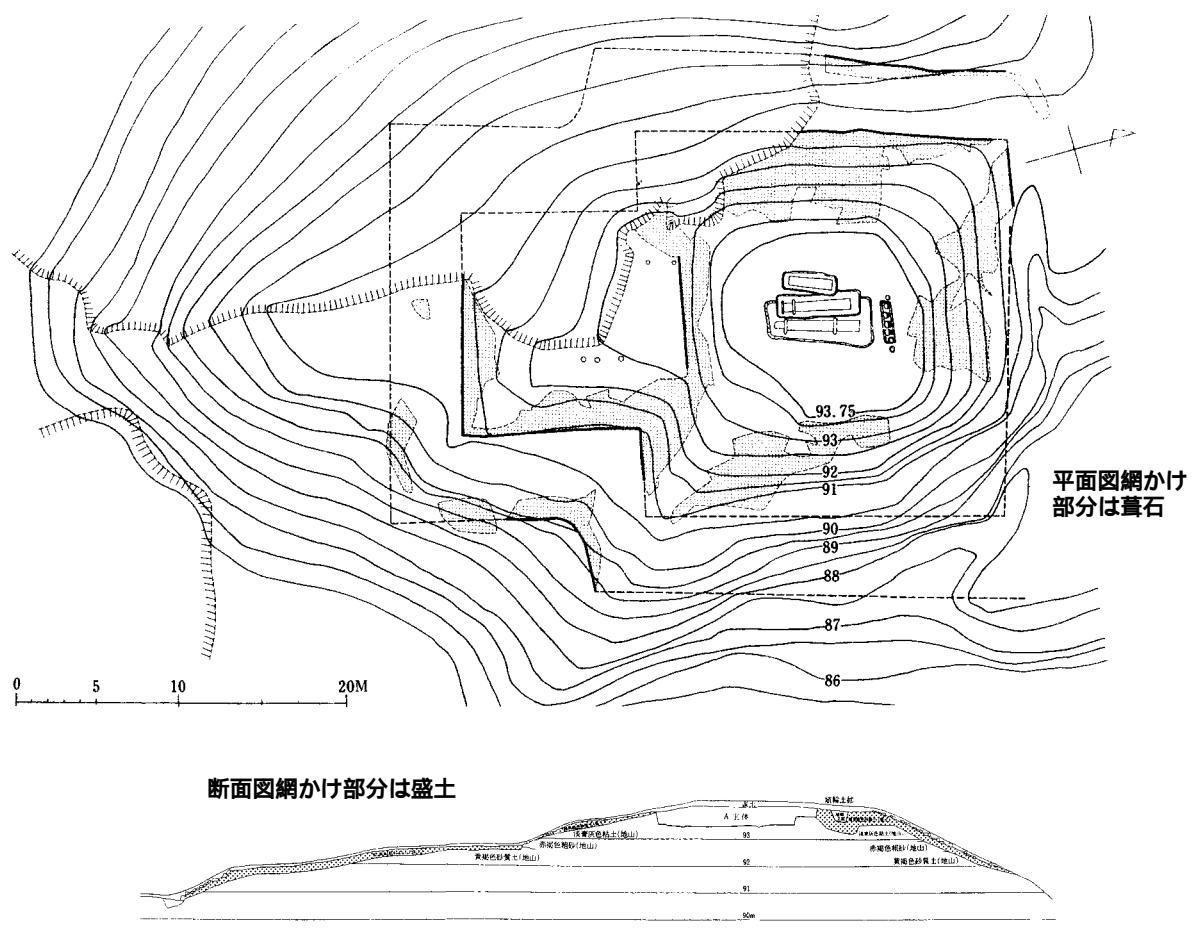


Fig. 4 弁天山 D2号墳 墳丘盛土状況

b 京都府鳥居前古墳（大阪大学1990）

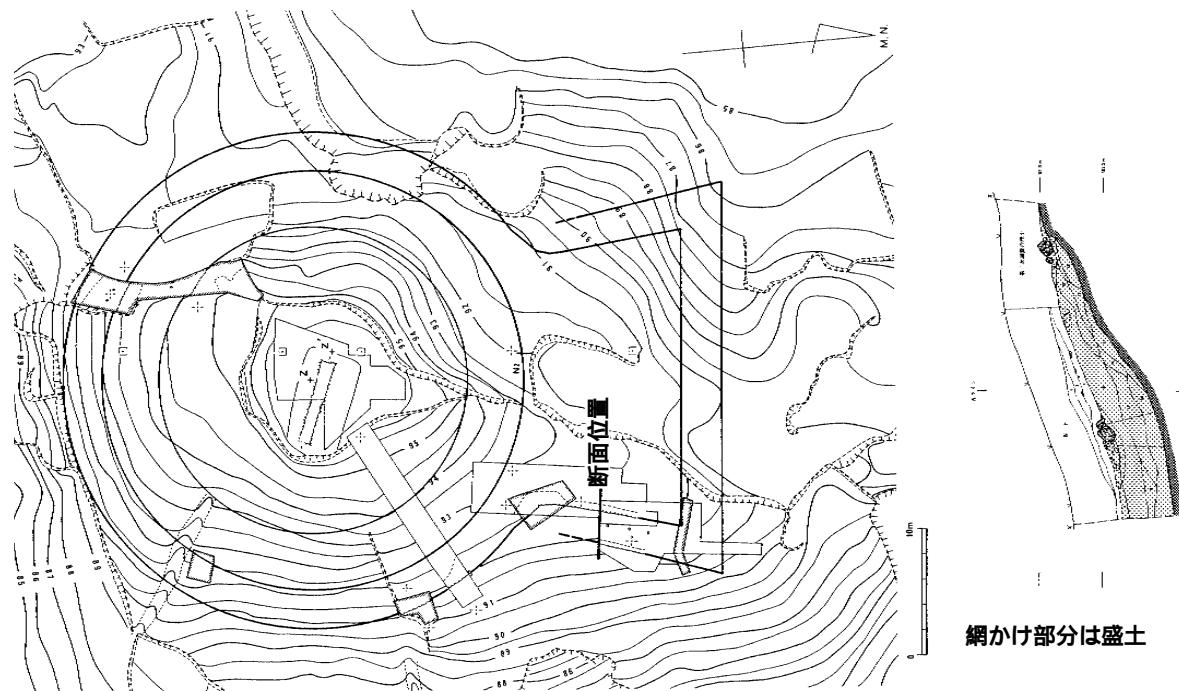


Fig. 5 鳥居前古墳 墳丘盛土状況

京都府大山崎町にある古墳時代中期初めに作られた前方後円墳である。前方部が短く、後円部三段、前方部二段の構成で、報告書では「前方部と後円部の最下段が段違いになるという特異な墳丘構造を持つ」特徴としている。省略程度の違いはあるが、弁天山D2号墳の最下段と通じるものである。

旧表土やその可能性のある土層が認められず、墳丘構築にあたって広範囲にわたって地山が削られたものである。盛土中に土壇状の高まりが確認され、それが墳丘のみならず墳丘外にまで及ぶ後円部最下段を構築する部分にも観察され、「土盛り作業の行程において一つの単位をなし、かつ傾斜面に一定の平坦面を確保することによって以後の土盛り作業を容易にすべく意図された足場」と推定された。（北条1990）地山が全面的に削平されることからも、盛土作業が計画性を持って行われたと思われる。

後円部を最高所とする地形に作られ、地山の傾斜に合わせて墳丘も傾斜している。前方部上段は地山を削り出しているよう、そこから急激に地山が下がり地形となっているために、盛土することによって墳丘外側にまで形成している。つまり上段葺石列がほぼ地山近くにあり、下段葺石列は盛土中に掘りこまれている。設計された墳形を得るために墳丘外にまで盛土によって地形を改変していることに注意したい。また、墳丘西側の詳細が分からぬものの、東側盛土は大規模であり、北から東側にかけて平野に開けた立地上との関係が指摘されている。

c 福島県堂ヶ作山古墳（会津若松市教委1996）

福島県会津若松市に所在する。後円部三段、前方部二段の築成と推定されたが、大きく地形に制約を受けた前方後円墳である。墳頂部トレンチでのみ盛土が確認され、その厚さは正確に分かっていない。報告書では後円部上段の大部分が盛土であると推定している。葺石は後円部中段の一部と上段、前方部東側くびれ部、西側上段で観察され、粘質土の地山部分に見られるとのことであり、岩盤のところはそれを葺石風に削り出しているという。後円部と前方部とも最下段には葺石が認められず、後円部についてはその変形も著しい。前方部の段築についても付加的な様相が強いように思われる。

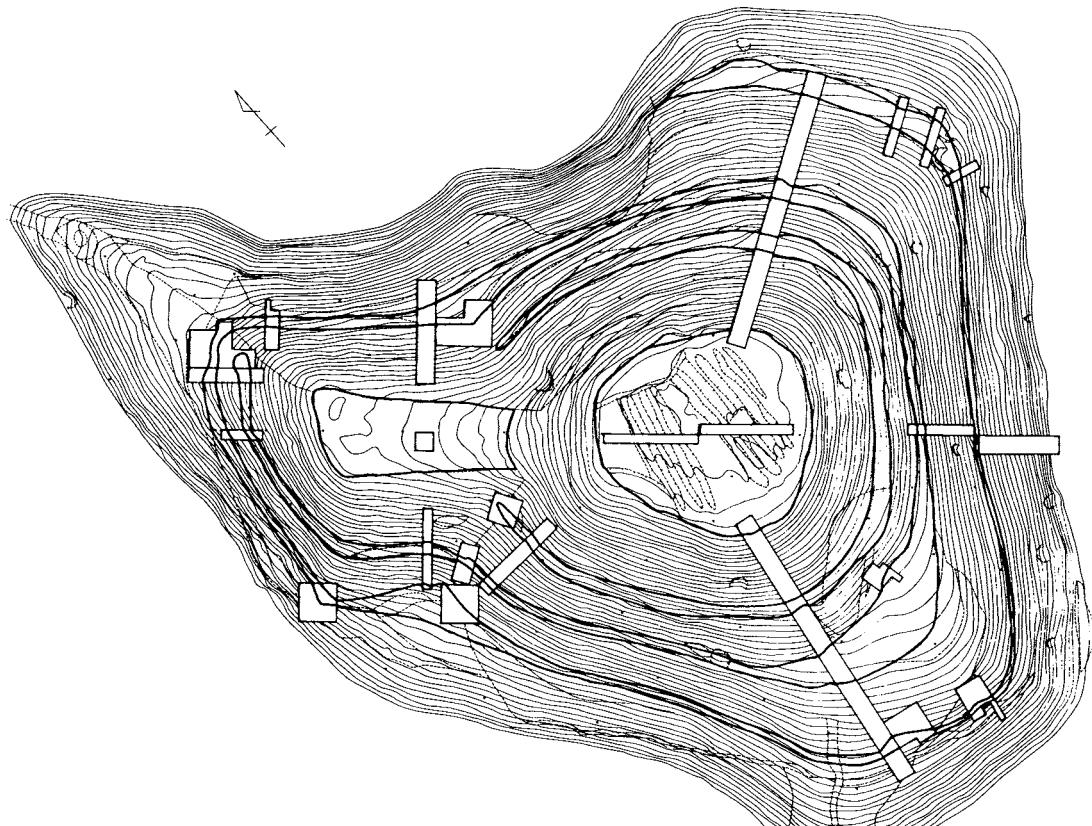


Fig. 6 堂ヶ作山古墳 墳丘図 ($S = 1 / 500$)

本墳の段築構成を示すテラス面が不明確で幅も狭い。地形に合わせて地山を削り出しているために前方部の両側面で東側が一段、西側が二段という違いが生じたのであろう。また、後円部最下段はほとんど地形に合わせて墳丘基底の平坦面を削り出しただけで非常に歪な後円部となっている。しかも前方部西側下段と一体となってくびれ部の平坦面を作っている。後円部最下段が歪な形でありながら前方部の下段に続していくので、そこが墳丘として意識されていたのである。一方で目的とする墳丘要素を入れるためににはこのように作らざるを得なかったという地形的要因が多分にあるのではないかとも考える。墳丘整備としての後円部の成形と前方部の墳丘成形が、前方後円形を作り出すという最終的な目的に昇華したものともいえよう。

段の築成と視覚的效果

前項で僅かな例を検討したが、丘陵上に位置し墳丘の大部分を地山削り出しによって作られた古墳には個性の強い墳丘形態を持つものがあることがわかった。一方、岡山県日上天王山古墳（津山市教委1997）や福岡県三国の鼻1号墳（小郡市教委1985）などのように、丘陵上に立地しながら下段を地山削り出して作り、上部を盛土によって構築するような前方後円墳には段築の省略や水平面を意識した墳丘構築など、前項で検討した地山削り出しを主体的に用いて作られた前方後円墳とは違う墳丘状況にある。秋常山1号墳はもちろん前者の範疇に入る。

墳丘要素の一部が省略されるのは古墳を作る主体者がそれを必要としなかったのか、それとも構築する技術の困難さがあったのか等の要因が求めることができ、個々の古墳の状況を検討することによって答えが見えてくる。先に検討した諸例は古墳が立地する地形にかなり制約を受けたものであり、古墳の占地した結果として省略あるいは改変が行なわれたものと考えられる。

しかし、諸条件によって墳丘要素の一部省略をあこなってもなお、古墳築造主体者が「前方後円墳」として使用・機能することに満足しなければ、それを作る目的が達成されないことになる。被葬者を埋葬する儀礼や墳丘あるいは周辺で行われたであろう祭儀が過不足なく執行される必要があり、埋葬儀礼終了後外部に古墳の威容を示すことも考慮され、それらを十分に満たす条件で墳丘の構築が行われたはずである。このように考えると、墳丘に観察されるいくつかの省略は単なる手抜きではなく、必要な要素以外を外して墳丘を構築した結果であり、その取捨選択はそれぞれの古墳の個性によって異なる状況といえよう。

埋葬儀礼や埋葬に伴う儀礼空間として墳丘を分析することで墳丘要素の省略を類型化する必要もあるが、それを考えるにはあまりにも材料が乏しく筆者の力量も及ばないので、ここでは外からどのようにみせようとしていたのか考えたい。

弁天山古墳群は北から南に伸びる主尾根とそれから東に派生する支尾根上に位置し、西には狭い谷が入りその対岸でほぼ同じ高さの尾根が伸びている。古墳は南に広がる平野を見下ろすこととなり、築造主体者にとってもそこから見られている意識が働いたことは容易に想像がつく。弁天山D2号墳は前方部下段基底から南7mほど平坦面が広がっているという余裕を持っていながら、そこを墳丘として使わずに空閑地とし、後方部背後の下段を作ることができない所まで北にずらして構築している。これはまた弁天山D2号墳の北側には弁天山D3号墳が築かれ、そこから見られることに意識されていないかのようである。つまり、外形としての墳丘は古墳群内で継続して行われた葬送儀礼執行・参加者からどのように見られるかを考慮して作られているわけではなく、被葬者が代表した平野部の集団構成員などから日常遠望されることを意識して作っているのであろう。鳥居前古墳や堂ヶ作山古墳についても同じような状況であり、集落から見られている墳丘側を定形にそして精美に作るという原則が働いているものといえる。

それと同時に、古墳の正面も意識して作られたものであろう。前方後円（方）墳の正面はどうかというのは、未だ定説のあるところではないが、葬列が墳丘を登る方向がその正面である可能性が大きい。

近藤義郎氏が最近の著書において、墳丘の傾斜角度を検討した結果、前方部隅角が外部から墳丘内部へそして埋葬施設への道であるとされている（近藤2000）。これは方形周溝墓の埋葬施設への道の考え方（都出1979）と通じるものである。また、富山県谷内16号墳でくびれ部付近から後円部頂にかけて墓道とおもわれる遺構が検出された（小矢部市教委1988）ほか、奈良県ナガレ山古墳の東側くびれ部前方部近くで墳丘埴輪列を横切る通路状の埴輪列が検出され（吉村1999）墳丘への「道」と認識されている。このような事例が検出されるのは稀な例であり、和田晴吾氏が整理した墓坑に至る墳丘への出入口についての研究（和田1997）が参考になる。ここではこれらの検出事例のほかに陸橋や造出での祭祀状況からくびれ部付近に墳丘への登り道を想定し、近藤氏と異なる結論に達している。

古墳の正面については、墓坑構築と納棺埋葬行為の関係、その時点で墳丘の築成状況はどうなっていたか、また葬送儀礼過程と儀礼執行者・参列者等の人の動きなど、前方後円墳を総体的にとらえる必要があり直ぐに結論を見るものではない。たとえば、ナガレ山古墳で検出された通路状遺構は円筒埴輪列樹立後に機能するものであり、その道が葬送儀礼時点で存在したかどうか結論を導くのは容易ではなく、納棺時とそれ以降の儀礼との在り方をイメージすることで推測できるものである。また谷内16号墳にしても墓道とされた以降の幅は1mと切り立った「馬の背」のようであり、類例の乏しさから普遍性を求められるか慎重にならねばならない。

秋常山1号墳はどうであろうか。大型古墳の威容を見せるという点で消極的な部分がある。現在、

前方部南に存在した丘陵は土取りによって失われ、古墳前面が開けた状態に感じる。しかし、古墳の東には幅30mの狭い水田がある谷をはさんで本墳が立地する丘陵よりも高い「西山丘陵」が迫り、南には「稻葉山丘陵」が続いているので、南から東にかけての眺望がまったくきかない。また、後円部西側には2号墳が隣接し、西からの眺望を阻害している。つまり、北から古墳を見た時には後円部と一部の前方部しか見られず、西から見た時には後円部の一部と前方部しか見えないことになるものの、少なくとも北や西方向から見られることを意識して作られたと推測できる。

次に秋常山1号墳が外部から見

られることについてどのような意識をもって作ったか問題となろうが、最下段が2号墳との取り付きにおいて段の省略が見られるなど厳密な意味での定式的な前方後円墳（北条1986）を志向したものとはいはず、地山削り出しを主体として作られた前方後円（方）墳における墳丘要素の一部省略に共通するものである。墳丘東側の下段テラスも前方部に向かって3mほど高くなり、前方部端がもう少し短くなる可能性も捨てきれない。

さらに、盛土によって後円部を中心に墳丘と相似形になった最下段は2号墳が立地する丘陵との間の谷と一体となっていく。外からの視覚を意識すれば墳丘を精美に作り、墳丘外についてもそれと一緒にとなるように修飾することによってより大きな古墳と誇示できる効果があり、その目的を達するために後円部最下段は墳丘と一体となって構築されたものである。しかし前方部にかけては等高線が墳丘内側に向かって流れる傾向で、後円部最下段基底をなす標高20mの等高線は報告書で想定された造出の下部に位置しそれが墳丘内方に向いている。たとえ敗戦後の食料増産活動の開墾による改变が著しくとも墳丘形状をまったく推測できないまでに破壊するとは考えがたく、逆に見れば、それだけ破壊による変形容易な構築物であったことがわかる。このように、前方部と後円部との間には比高差が生じてあり、最下段を作るにあたって修飾的な意味合いも強かったのではないかと考える。

まとめ

秋常山1号墳を観察すると、「なぜ2号墳の方に前方部を作らなかったのか」という素朴な疑問がわいてくる。仮にそのようにして前方後円墳をつくると、北や西に向かって北陸最大級の墳丘の威容を示すことができ、遠くからでもその存在を認め誇示できたであろう。本墳のすぐ北には手取川が流れ、それを意識した立地であることは可能性のあることである。しかし古墳の築造主体者はそうしなかったのである。2号墳が既に作っていたのであろうか、それとも2号墳との計画的な配置による



Fig. 7 秋常山古墳周辺地形 ($S = 1 / 15,000$)
矢印からの眺めが最も良好である。

ものであろうか、これら2古墳が作られた前後関係が確定されねば答えは得られない。

大形前方後円墳築造には、類似する墳丘形態からその企画が存在したとして多くの先学の研究によって知られているところである（上田1969、石部他1979、岸本1992など）。しかし、これらの企画論は畿内中枢部の大形前方後円墳の資料を中心に扱っており、尺度論をはじめとして墳形の類似性の合理的な抽出に主眼が置かれ、大形前方後円墳築造を政治史的観点からその意義を考えるものである。岸本直文氏はやや視点を異にして、これらの変化から規格の系列を抽出し、かつ地方の大形前方後円墳で相似墳を抽出することによって、倭王権の構造を考察するというものである。

筆者たちのように地方で研究するものにとって、地方の前方後円墳がどの畿内大形前方後円墳と類似する企画を持つのかあるいはどのような規格の上に作られているのか、を知ることが畿内と地方との関係を直接的に知る上に重要なものとなっている。一方、畿内からの一元的な影響のもとに古墳（この場合は前方後円墳を作る考え方になろうか）を考えるべきではなく、むしろ自律的な側面を重視しつつ畿内と地方を「等質的な構成体として固有の位置を占めるといった視点に立ち、相互の結びつき方や競合関係を具体的に復原する手続きが必要」（北条1999）であることにも注意しなければならない。つまり、個々の古墳を畿内大形前方後円墳の企画の類似を無批判的に検証することよりも、その相違点も明らかにして地域での独自な動きも把握する必要がある。

また先に見たような丘陵上に位置する地山削り出しの前方後円墳と盛土主体の前方後円墳とでは、共通する墳丘企画が当てはまるか疑問である。もちろん丘陵上に位置する岡山県備前車塚古墳が奈良県箸墓古墳の墳丘の六分の一の企画で作られている可能性が指摘されているところであり（北条1986）、前方後円墳の「形」の系列は単純でなさそうである。また、福井県六呂瀬山古墳群や同手縄ヶ城山古墳、岐阜県親ヶ谷古墳など、定型的な墳丘を持たない前方後円墳の一群がある。まだ具体的な検討を行っていないが、これらは構築技術の系譜が平地に作られる盛土主体の前方後円墳と異なり、築造企画も異なる可能性を考えている。北条氏が讃岐型前方後円墳を提唱したように（北条1999）、畿内の大王陵級古墳を中心とする大型前方後円墳企画とは異なる「形」の系譜を想定してもよいのではないかと考える。

さて、能登の大形古墳である雨ノ宮1号墳の調査で、板で土留めして盛土構築を行うような技術が確認された（中屋1998）。この技術は愛媛県妙見山古墳でも確認されており、大形古墳を構築する技術の一つであったものである。大形前方後円（方）墳の築造にあたっては何らかの企画をもとに作られていることは、その整美な姿から容易に理解できる所であるが、設計図だけが独り歩きするものではなく土木技術が一緒にもたらされていると考えられる。その両面を検討することで、墳丘企画の選択がどのような政治的レベルで決まるのか、古墳築造に専従する集団との関係、あるいは地域間の繋がり等を知ることができる可能性を持つのである。

このように考えてくると、必ずしも秋常山古墳を三段築成の定式的な前方後円墳とする根拠が少なくなってきたと思われる。最下段は墳丘修飾の段として後円部からくびれ部にかけて構築され、それが墳丘を大きく見せる効果を生じている。その最下段を墳丘の段築と見るかそれとも基段あるいは奈良県西殿塚古墳のようなエプロン的存在とするか、意見の分かれるところであり、ここでは墳丘に付属する後者の考え方によりたい。そして視覚的に必ずしも必要とされなかった前方部前面まで段を作らなかつた可能性を考える。

なお、秋常山古墳群は史跡整備事業が始まり活用に向けて有意な第一歩を踏み出している。これらの整備のための調査によって重要な成果がさらに得られることであろう。本稿は、古墳を作るという観点から見た場合の本墳を理解するための一つの考え方として提示した次第である。

かつて学生時代に大阪府教育委員会の一瀬和夫氏について大阪府誉田山古墳や大阪府市野山古墳の外堤の発掘を通して巨大古墳の構築状況を目の当たりにし、古墳の築造技術を理解する重要さを学んだ。筆者は一瀬氏のような構築理論（一瀬1986、1991）を持っている訳ではないが、墳丘の築造技術と企画について50m前後の小型前方後円墳や尾根上の不正形な前方後円墳に研究者の目が十分に届いていないという問題があることに気がついた。また、北陸や日本海沿岸地域を中心に考えると、方形台状墓、四隅突出墓、前方後方墳等の構築技術が前方後円墳とどのように通じてどの点で異なるか等の問題が未整理の状態にある。これからの研究課題としたい。

最後に、秋常山古墳群発掘調査団による検討会や会議における多くの調査団員の方々の発言や教示、特に石部正志先生の意見や指摘に大きな啓発を受けた。文末ですが皆様に深謝いたします。

参考文献

- 会津若松市教育委員会1996『堂ヶ作山古墳』
石部正志・田中英夫・宮川徳・堀田啓一1979「畿内大型前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89号 古代学研究会
一瀬和夫1986「前方後円形墳丘の周溝掘削パターンと区画性 - 前方後円形成立に関する覚書 - 」『古代学研究』112号 古代学研究会
一瀬和夫1991「墳丘墓」『原始・古代日本の墓制』同成社
上田宏範1996『増補新版 前方後円墳』学生社
大阪大学文学部考古学研究室1990『鳥居前古墳 - 総括編 - 』
大阪府教教育委員会1967『弁天山古墳群の調査』
小郡市教育委員会1985『三国の遺跡』
小矢部市教育委員会1988『谷内16号古墳』
金沢大学考古学研究会1986『金沢大学考古学研究会活動報告』第4号
岸本直文1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39巻2号 考古学研究会
近藤義郎2000「前方後円墳観察への招待」青木書店
都出比呂志1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26巻3号 考古学研究会
津山市教育委員会1997『日上天王山古墳』
寺井町教育委員会1996『寺井町 秋常山古墳群』
寺井町教育委員会1997『加賀 能美古墳群』
樋本誠一1978「前方後円墳の企画とその実態」『考古学ジャーナル』 150
北条芳隆1986「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」『考古学研究』32巻4号考古学研究会
北条芳隆1990「墳丘築成における土壇の意味」『鳥居前古墳 - 総括編 - 』大阪大学文学部考古学研究室
北条芳隆1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室
中屋克彦1998「石川県鹿西町雨ノ宮1号墳の発掘調査」『古代』105号 早稲田大学考古学会
吉村公男1999「古墳の正面觀」『同志社大学考古学シリーズ 考古学に学ぶ』
和田晴吾1997「墓坑と墳丘の出入口」『立命館大学考古学論集』

補記

本稿脱稿後に、平成13年度整備計画に伴って秋常山1号墳後円部西側と同2号墳北側くびれ部を中心に行き調査が実施され、10月に調査を終了する予定である。来年度以降も史跡整備に関する調査が実施され、その結果によっては今回の見通しに大幅な変更の必要が生じるかもしれない。今年度の調査については現在進行しているものであり、まとまった形でその成果が公表されていないが、筆者の現時点における現地調査の見学による観察から、いくつか気の付く点あるいは新たな見通しなどを補足したい。

1・2号墳にかけて古墳築造時の旧地表の可能性のある黒色土層が検出されている。この土層は1号墳から2号墳にかけて広く確認され、1号墳トレンチ断面で標高約34mから標高32m付近にかけて、2号墳のくびれ部で標高31.5m付近（図面との照合によって高さを求めたもので正確ではない）に見られるようであり、1号墳から2号墳に傾斜する旧地形であることを確認した。そして、それより低い地形の部分では地山が露呈しているので、二つの古墳間は開削されており、深い谷状地形の想定は困難と考える。

また、本論では1・2号墳の間は地山成形によって墳丘を作っていると考えた。基本的にこの想定は間違っていないものの、地山開削が墳丘表面近くにとどまらず、内側まで及んでおり、結果として多くの土を盛ることによって墳形を作り出している。この盛土が本文中で言う盛土類の斜め堆積によるものであり、大型古墳の墳丘盛土にしては強度の点で問題がある施工方法となっている。そして、それを境にして上部の盛土方法と下部のそれとやや異なるようである。

すなわち、前者は後円部円周に沿って土壘状に土盛りをおこない、次にその内側を内に向かって傾斜をもつように盛土する方法で、前方後円墳によくみられる技法である。一方、後者は地形の傾斜に合わせて斜めに堆積した盛土となっており、1号墳東側の下段・最下段の盛土に通じるものであろう。この技法の違いは、平坦面に盛土をおこなうときと傾斜面に盛土をおこなう技術が異なることを示し、後者の盛土の構造的強度が弱いことは言うまでもない。この違いが土工集団の違いを示すのかそれとも盛土の目的とするところが違うのか等考えられる。

従前、2号墳の埴輪から1号墳から2号墳という築造の流れを想定してきたが、これももう一度白紙に戻して考えることも可能になってきた。それは、1・2号墳の間には深い谷は無くむしろなだらかに下がる地形が想定された結果、2号墳が本来持つべき墳丘東側（尾根筋にあたる）の周溝のような墳丘を画する施設が見られないのは1号墳築造によって損壊したためと考えることも可能であるからである。1号墳は先代の首長の墳墓である2号墳を避けるように作らねばならないという制約を持っていたために南に前方部を作ったものであろう。これによって、なぜ2号墳の方に前方部を作ることをしなかったのか、という疑問に一つの答えを出すことができる。

なお、検出された下段葺石と墳頂との間に極端に傾斜が緩くなった葺石が検出され、当該部分はまさに前方部平坦面から後円部に接する部分の高さと合致する。これから調査によってどのような形となるのか、調査成果を見守りたい。



Fig. 8 手取川から望む能美古墳群

能美古墳群の北には手取川が流れている。古墳時代はより北に流れていたと考えられ、手取川から遡上する舟から見られることを意識したものではない。しかし、その堤防から眺める秋常山古墳群を中心とする能美古墳群の威容を感じることができる。